

「週刊誌」などの医療情報記事について

平成30年3月放送

大門 和

最近、複数の週刊誌に、「絶対飲んではいけない薬」などというように見出しの記事が掲載され始めました。週刊誌は、説明しにくい病気なども、時にわかりやすく語られているので、なるほどと感心させられることも多くあります。しかし、最近の記事は、少し様子が異なる気がします。週刊誌特有の、誇張した表現に、毎回苦笑いするだけでは済まされない心持ちです。たとえば一時期、メモ書きを広げて、「これらの薬は出さないでください」とはっきり言われたり、「あの薬は危険だと言われたので、もうやめています」と言われた患者さんが複数おられました。いずれも週刊誌に毎回書かれている薬の名前です。ご家族や友人など身近な人からの聞き伝えも多く、直接週刊誌の記事を詳しく読んだ方は意外と少ないようです。さて、記事の内容ですが、決して真っ赤な嘘ばかりではありません。しかし、その多くが、極端な誇張や異なった解釈の寄せ集めで成り立ち、その表現が巧みで、全面否定の反論が出来ないようになっています。逆に言うと、その事は、病院で処方する薬には、「隠し事がない」という事です。

それぞれの病気に対する薬の治療効果の程度はもちろんの事、副作用や有害作用について、すべて詳しく情報が一般公開されています。製薬会社も、医療機



関も、重大な副作用があった時は、厚生労働省に報告することが義務付けられています。その結果は、各医療機関に通知されます。医者だけでなく、一般の方々も、インターネットでそれらを詳しく記載した薬の情

報、これを「薬剤の添付文書」と呼びますが、これを見ることが出来ます。医者もそうした情報に基づいて、実際にその薬を使っている患者さんに対して、効き目はどの程度か、副作用が出ていないかどうか常日頃チェックしながら診療を行っています。どんなよく効く薬にも、体質の合わない患者さんや、稀な副作用はあるものです。当然、医者任せにせず、それを知ることはとても大切なことです。しかし、医者に相談せず、怖いことばかり書かれている週刊誌の情報だけをうのみにしてしまうことは、余計に怖いことです。付け加えるならば、病院で医師が処方する薬以外の薬、いわゆる民間薬やサプリメントには、詳しいお薬の科学的データがほとんどありません。どれだけの効果があるのか、副作用がどの程度なのか、誰も知りません。



しばしば、「今飲んでいるサプリメントは大丈夫ですか？」と相談されますが、医者の方にとっては、これが一番困ったことです。いずれにしても、病院から処方している薬に関して、医者が患者さんに十分治療効果や副作用について説明する努力を怠ってきたことが、背景にあると反省させられる面もあります。今飲んでいる薬に不安があれば、遠慮せずに、医者に尋ねるようにしてください。「余計な事を聞くな」と言われたら、病院を変えることも、必要かもしれません。最後、ちょっと言い過ぎたところで話を終わります。